

Iba Apprentice Blacksmith of Level 596

レベル596の 鉄治見習い



Terao Yuki

寺尾 友希

Illustration

うおのめうろこ

●登場人物紹介●

伝説の勇者パーティ



●マッセイ●

サイの獣人。
ほとんど喋らない重劍豪。
マツ翁と呼ばれることも。

●ジェラルド●

牛の獣人。
テントコーン王国の国王。
ノアにとっては叔父にあたる。



●ルル●

リスの獣人。
ノアのことを可愛がる
大賢者で、ララとは双子。

●ララ●

リスの獣人。
ノアのことを可愛がる
大盗賊で、ルルとは双子。



●テリテ●

熊の獣人。
ノアの家の隣に住んでいる、
頼りがいのある農家の主婦。

●???●

ノアのことをよく知る
謎の美女。
その正体は……

●ノマド●

ノアの父で犬の獣人。
『神の鍛冶士』という
称号を持つ。
腕はいいが
生活能力が皆無。

●ノア●

14歳の犬の獣人。
凄腕鍛冶士の父に憧れ、
見習いをやっている。

01 オイラの日常は異常なようです

「父ちゃん、鍛冶ギルドから依頼が来てるよ。攻撃力500以上の、鋼の片手剣五つだって」

「へっ、この俺が、そんなナマクラなんざ打てるかよお」
「そんなこと言つたつて父ちゃん、ここんとこ全然仕事してないじゃないか。二か月前の、ジエル
おじさんの依頼が最後で。酒飲んでばつか」

「……オムラよお、なんで死んじまつたんだよお……」

「ああ、ダメだ、寝ちゃつた」

かろうじてこちらを向いていた茶色い犬耳がくたりと垂れて、こたつ布団の上に黒いぐい呑みが
転がる。赤い顔をしていびきをかき始めた父ちゃんの肩へ、オイラはため息交じりにそのへんに丸
まつていた襦袢を被せた。

もうすぐ春とはいえ、まだ寒い。

コタツで寝ちゃうのはいつものことだけど、犬の獣人のくせに、父ちゃんは寒さに弱いから……

オイラはノア。

鍛治見習いの、十四歳。

父ちゃんと同じ、犬の獣人だ。チャームポイントは、垂れた薄茶の耳とふさふさしつぽ。垂れ耳は、犬の獣人の中じや人気が高いんだぞ……つて、そんなことはどうでもいい。

問題は、父ちゃんだ。

父ちゃんは、『神の鍛治士』とまで言われた、凄腕の鍛治士だった。

……八年前、母ちゃんが死ぬまでは。

鍛治の天才、と言えば聞こえはいいけれど、父ちゃんは鍛治以外何も出来ないダメ人間だった。最高の鉱石と素材（鍛治に使うことで、攻撃力アップなどの効果が武具に付与できる特殊な魔物素材を、鍛治士は単に「素材」と呼ぶ）、仕事場さえ用意すれば、神がかつた腕で、伝説級の武器すら打てる名職人。その一方で、生活力は皆無。

鉱石や素材の仕入れ、ギルドや卸し業者との交渉をしていた元冒険者の母ちゃんが死ぬと、いい鉱石を仕入れることも出来ず、悪質な素材を高値で掴まされた。さらには、倉庫にあつた高価な素材や武器も二束三文で騙し取られて、すっかり世を拗ねて酒におぼれるようになつちやつた。

今じや、母ちゃんのパートナーだった、ジエルおじさん、ルル婆とララ婆、マッセイ翁から依頼しか受けない始末。

母ちゃんが死んだとき、オイラは六歳。

オイラが八歳になる頃には、倉庫はガランとして何もなくなつて、酔いどれた父ちゃんの飲み代や食費は、オイラがあちこちの雑用を手伝つてもらつた小遣いや食料で賄うようになつていた。

それと、たまに入る、ジエルおじさんたちからの依頼料。

でも、せつかく剣を打つて、まとまつたお金が入つたと思つても、こういう父ちゃんのことだから、騙されたり無駄遣いしたりおごつたりして、すぐに無一文に戻つちゃうんだけどね。人はいいんだよ、うちの父ちゃん。

父ちゃんが眠りながら抱え込むようにしていたぐい呑みを、ボロ布でぬぐつて箱膳の中へ片付けつつ、オイラはふと八歳の頃のことを思い出した。

何ヶ月も火の入つていない炉の前に座り、酔っぱらつた父ちゃんがオイラに言う。

「ノア！ オリハルコン持つてこい！」

……たまに依頼が入つたと思つたら、これだもんね。

まあ、父ちゃんには、鉱石や素材を仕入れる能力なんてないから、しようがないんだけど。

「ないよ、そんなの!? うちの倉庫が空っぽなの、父ちゃんだけって知つてるだろ?」

「最果ての亀裂にでも行きやあゴロゴロ転がつとるだろ」「どこだよ、そのムチャクチャ遠そなトコ!?」

「母ちゃんはよく行つてたぞ」

かくして、この日から、オイラの鉱石拾いと素材集めが始まつた。

幸いにも、うちがあるのは王都・コーンハーベスタの外れ、『無限の荒野』のすぐ近くだつた。

父ちゃんの言う、『最果ての亀裂』とかいうどこみたいに、オリハルコン鉱石がゴロゴロ、つ

てわけにはいかなかつたけれど、鉄とか銅鉱石なら普通に落ちているし、何千回かに一回、たまーーーに石の魔獸が、アダマンタイトやオリハルコンを落とすこともある。

そう、魔獸。

王都の北側に広がる、『無限の荒野』と『龍の棲む山脈』、『獣の森』には魔獸が出る。

魔獸を倒せば、当然、肉や素材が手に入るわけだけど……：

ろくに武器もない八歳のガキンちよには、まーキツかつた。

手には鍛冶場の隅に転がつていた古い金槌^{すみ}、背中にはボロボロのリュック、装備は父ちゃんのお古の革エプロンに革の手袋、革のブーツ。鍛冶屋仕様で、火には強いのがせめてもの防御。ボロボロになつて、せつからく拾つた鉱石も素材も投げ捨てて、命からがら逃げ出したことも数知れず。おかげで、魔法も戦闘スキルもゼロだけど、逃げ足だけは超～～速くなつた。

まあ、ある程度鉱石を拾えるようになつて、自分で見よう見まねで剣を打つようになつてからは、いくらかましになつたけど。

もちろん、父ちゃんは、鍛冶なんて教えてくれない。ていうか、天才肌の父ちゃんは、人に教えるのが超下手。弟子が居ついた試しがないつて、母ちゃんが嘆いていたのを覚えている。母ちゃんが死んだ後、お弟子さんの一人でもいたら、違つてたかもしれないのにね。

そんなこんなで、自分でもよく生きてたと思うけれど、鉱石や素材集めもだいぶうまくなり、オイラは十四歳になつた。あと一年もすれば成人だ。

……なんでかまだよく小さい子扱いされるけど、十四歳つたら十四歳。

「父ちゃん、そろそろオイラにも、剣の打ち方、教えてよ」

「ふん、お前にや百年はええ。……ひつく」

「しようがない。じやあ、お隣のテリテおばさんに頼まれた、草刈り鎌^{がま}でも作るか」

分かつちやいたけど、こうもあっさり断られると落ち込む。肩を落とし、鍛冶場へと向かうオイラを、父ちゃんの酒に濁つた目が不思議そうに見つめた。

「なんてい、ノア、お前、鎌なんて打つてたのか」

「今ごろ!? 父ちゃんの食べてるご飯分、誰が稼いでると思つてのさ? ご近所さんの鍬^{くわ}とか鋤^{すき}とか鉈^{なた}とか斧^のとか。食べ物との物々交換がほとんどだけど、うちは金があつてもすぐ父ちゃんが使つちゃうから、おかげで食いつぱぐれなくてすんでるんだよ?」

「へえ」

全く反省の色のない父ちゃんに苦笑いしつつ、オイラは鍛冶場の隅に自作した、自分用の作業場へと父ちゃんを引っ張つて行く。普段ならそれくらいで腰を上げたりしない父ちゃんだけれど、やつぱり鍛冶には興味があるのか、黙つて付いてきてくれた。

ちなみに鍛冶場は、父ちゃんがいつもくだを巻いているコタツから、土間を挟んで反対側の屋根続き。うちは養蚕農家だつたものを改造していく、馬小屋だつたところが鍛冶場に変わつていて。養蚕農家だつただけあって、梁も柱も煤で真つ黒だ。養蚕農家つていうのは、お蚕様^{かこさま}が凍えないと家の中で直接火を焚くらしい。家の裏手には、蚕の守り神の蛇^{へび}を祀るほこらもあつたりする。

9 レベル596の鍛冶見習い

「もう五年使つてゐるからさ。鎌の打ち方でいいから、見てて教えてよ。えーっと、テリテおばさん
は、草が焼き払えたらいいのに、つて言つてたから。まずは、マグマ石にアーマンタイト、火竜の
ウロコにグリフオンの羽根……」

「ちょっと待て」

材料を見た父ちゃんの頬ほおが大きく引きつる。

あれ?

何かマズいものでも入つてたかな?

「え? ダメ? マグマ石をベースにすれば、雑草くらい簡単に焼き払える鎌になると思うんだけど
ど。ああ、そつか! これだと、小麦の収穫とかには使えないか!」

「いや、ちょっと待て!」

なぜか父ちゃんがオイラの肩をガシッと掴む。

べつに逃げるつもりはないんだけど?

「たかが草刈り鎌にマグマ石? アーマンタイト? まして、火竜のウロコだと!? ノア、お前、
これをどこで手に入れた?」

父ちゃんの目が、なぜだか据すわつている。

「どこつて? ふつうに、『竜の棲む山脈』で、火竜からプラチツと」

「……ハアツツツ!」

なに当たり前のこと聞いてんの、と首を傾げたオイラとは対照的に、父ちゃんの目蓋まぶたがヒククと

引きつった。

「えつ?」

そのとたん、父ちゃんはズダダタダツとオイラを引きずつて母屋おもやへ駆け込み、仮壇よみだん前に供そなえて
あつた緊急用の魔法のクルミを拳こぶしで粉碎ふんざいした。

その瞬間、ジリリリリリツとベルのようなけたたましい音が鳴り響く。

「あーあ、もつたいない」

あれは確かに、かなり高額だつたはず。母ちゃんが生きていたときから、母屋おもやの居間に置いてあつ
た。元は、母ちゃんが冒險者をやめるときに、パーティの全員がひとつずつ持つことにしたもので、
何かあつたときにお互いに知らせ合うための緊急連絡の魔道具まごうぐうだつた。

言葉を伝えることは出来ないが、その代わり、とつておきの能力がある。

なんと、無事なクルミを持つ全員を、割つた者の判断で、即座に召喚しようかん出来てしまふのだ。

「聖騎士オムラが召喚する! 勇者ジエラルド! 大賢者ルル! 大盗賊ララ! 重劍豪マッセ

イ! ここに来たれ!」

だれそれ?

なんか、聞いたことのない呼称きましたけど?

02 オイラのレベルは異常なようです

「ノマド!? いつたい何事だ?」

「おやノアちゃん、お久しぶりじゃねえ」

「ノアちゃんもすっかり大きくなつて」

「…………」

驚いた様子のジエルおじさんに、いつも通りのルル婆、ララ婆、無口なマツ翁が土間に……と思つたけれど、よく見るとマツ翁は、しゃくれた口の隙間に歯ブラシをくわえている。

急な呼び出しだつたもんねえ。それに、ちようど朝ごはんの後くらいのタイミングだつたし。

ジエルおじさんは牛の獣人。身長は父ちゃんより頭ひとつは大きい。

ルル婆とララ婆は双子のリスの獣人。「一人ともいつも魔法でふわふわと浮いている。身長は父ちゃんの半分ほどだけれど、空中でちよこんと丸まつて座つてゐるせいで、本当の身長よりずっと小さく見える。

マツ翁はサイの獣人。でかい。硬い。

「すまんが、ルル姐ねえ、ノアを鑑定してみてくれんか」

父ちゃんの言葉に、ルル婆は不思議そうにオイラのほうを見つめ、そしてビン底みたいなグルグル

ル眼鏡めがねを巾着きんちやくから取り出す。

「答へんか、ノマド！ ノアがどうかしたのか?!」

ジエルおじさんは母ちゃんの弟で、母ちゃんとは全く似ていらないオイラを、ものすごく気にかけてくれている。

母ちゃんは透すき通とおる金髪の美人さんだったらしいが、オイラは緑がかつた稻いなわら頭のそばかす顔だ。恰好は八歳のときからずっと、鍛冶屋まえかの前掛けに革のグローブ、革のブーツ。変わつたのは、黒いモフモフの首巻きだけ。

父ちゃんが渋い顔をして腕を組む。

「マダマ石にアダマンタイト、おまけに火竜のウロコを使って、ご近所さんの草刈り鎌を作つていたんだ」

父ちゃんの言葉に、ジエルおじさんが眉をひそめる。

「はあ？ なんでもまたそんな。もつたいない。ご近所さんってのは、そんな金持ちなのか？」

「いや、食い物と物々交換らしい」

「ハア?!」

ジエルおじさんがいぶかしげな顔をしたところで、ルル婆がにんまりと笑つた。

「ほお……これはまた」

鑑定というのは魔法の一種で、相手のレベルやスキル、ステータスなんかが分かるらしい。使える魔法使いはほとんどいなくて、冒險者ギルドとかに行けば、鑑定の魔導具とかあるらしいけど。

冒險者でもない一般人は、みんな自分のレベルやステータスなんて気にせず暮らしていると思う。

隣のテリテおばさんだつて、自分のレベルなんて知らないだろうし。

そういえば、さつき父ちゃんが、ルル婆を大賢者って呼んでたような気がするけど……？

「レベル、596じゃの」

「……。はあ!?」

「……こりやたまげたの」

「……」

「やつぱり、というか……」

「あぜんとする皆の中で、父ちゃんだけが眉間にみけんしわを寄せて首をやれやれといった感じに振つている。

その父ちゃんに、ジエルおじさんが信じられない、という顔を向けた。

「ちよつと待て、ルル姐の見間違いじやなく？ ノアが、ノマドの仕事用の素材でいたずらしてる、つて話じやないのか？」

「それなら、緊急用のクルミなんぞ使わんさ」

「？」

オイラとしては、なんで父ちゃんたちが困つた顔をしているのか分からぬ。

ここ数年、鉱石拾いと素材集めしかしてないし、この歳にしては取り返しのつかないほどレベルが低いのだろうか？



でも、鍛治屋にそこまでレベルが必要なことなんてないと思う。

……つていうか、そもそも、その鍛冶についてすらろくに教えてもらつてないんだつた。今オイラに出来ることって、雑用だけ？

ひょつとしたら、鍛冶士になるには物凄くレベルが必要だつたりするとか？

「なにか、マズイの？」

恐る恐る聞いたオイラの肩を掴んだまま、父ちゃんが大きくなめ息をついた。

「なのに、そんなにダメ？」

「いいか、ノア。よく聞け。ここにいるジエルは、前代の勇者だ。王都に現れた強力なアンデッドを倒し、『不死殺しの英雄』とか『英雄王』とか呼ばれている。そのジエルでさえ、今のレベルは……」

そこで父ちゃんがチラツとルル婆を見る。

「249じゃの。というかお前さん、わしやらと別れてから、ひとつもレベルが上がっておらんじやないか。いくら王様稼業とはいえ、鍛錬をしやばつていはいかんの」

「あれからもう十五年だといふに」

「わしやらは20は上がつたに」

「英雄王などと呼ばれて天狗になつたかの」

「腹のあたりもゆるんでおるようじやしの」

「しょんなんだから、オムラに袖にしやれるんだわ」

ルル婆とララ婆に口々に言われて、ジエルおじさんはしなびた菜つ葉みたいになつた。
「つて、えつ？ ジエルおじさん、王様？」
「驚くとこそこかよ。つていうか言つてなかつたか？ このデントコーン王国の百七代目国王、ジエラルド一世、略してジエルだ」

「ほえーーー」

父ちゃんの言葉に思わず、しなびたジエルおじさんを一度見する。

ジエルおじさん、いつもオイラをかまいすぎて、ちょっとうつとうしいとか思つてごめんなさい。まさかそんな偉い人だつたとは。

「ともかく、そのジエルさえレベル249、戦闘職でない俺で80ちよいつてとこだ。自分で言うのもなんだが、伝説の鍛冶士レベルで80。今の、平和な世の冒険者たちだと、駆け出しで10、ベテランで40、上位でも60つてとこか。で、お前のレベルは？」

「あれ？ いくつだっけ？」

ど忘れしたオイラが、ちらつとルル婆を見つめると……

「596だ、596！」

父ちゃんにつつこまれた。

あれ？ おかしいな。

なんで父ちゃんが常識人で、オイラが非常識みたいなくくりになつてるんだろう？ すごく心外だ。

「えーと。なんで?」

「それを俺が聞いてるんだよお」

ついには頭を抱えられた。

あれ、なにこの扱い。あつかい普段と逆すぎてついていけない。

「つてか、それじや、オイラ、鍛冶士になれるつてこと? 鍛冶士になるのにレベルが低すぎるんじゃ、つて心配してたんだけど」

「……どこの鍛冶士に、596なんてレベルが必要だつーんだ」

さらには、なんだか可哀そかわいなものを見る目で見られた。

「とにかく落ち着け、ノマド。何か心当たりはないのか、ノア?」

「鉱石拾いと素材集めって、ノマドの鍛冶の材料かい? 仕入れないで、自分で集めてたのかい?」

「あはは、うちにオリハルコンだのミスリルだのを仕入れられるお金はないよー」

パタパタ手を振つて軽く流したオイラを通り越して、ララ婆が父ちゃんに詰め寄つた。

「ノマド。あたしやはキッチリ、材料代も含めて前払い渡したと思うんだけどね。なんでノア

しゃんが鉱石拾いなんぞしとるんだい?」

「いやー、その」

父ちゃんの目が激しく泳いでいる。

「だめだよ、ララ婆。父ちゃんに金なんか持たせちゃ。鉱石なんて買う前に、あつと言う間に酒代のツケで消えちやうんだから。ツケを払つても金が残れば、居合わせた全員におごつて騒いで終わり。いつそ清々しいよね」

オイラにとつては、もはや怒りも呆れも通り越して、ほほ笑ましいとすら思える父ちゃんの生態だけれど、ルル婆とララ婆はそこまで達観出来ないようだった。

「ノーマードー!」

いい歳をして床に正座させられた父ちゃんの横では、まだジエルおじさんがしなびている。王様のくせに、メンタル弱いよね。

「で、ノアしやん。鉱石拾いって、どこで?」

「「……」」

「え? 近いし?」

なぜか皆絶句していた。

聞いてみると、冒険者は最初、王城の近くにある『始まりの洞窟』で、レベル5くらいまで修練を積むそうだ。次に、王都近郊の畠や村を荒らす猪やゴブリンなどの退治を請け負う。

レベル10で『獣の森』に挑み、レベル20で王国の西にある砂漠地帯や各地にある中級ダンジョンに、レベル40で『大湿原』や『霧の森』、さらに上位冒険者が『無限の荒野』や上位ダンジョンへ

挑戦、という流れらしい。

現時点では、『竜の棲む山脈』へ挑戦出来るレベルの冒険者はいないそうだ。もちろん、ルル婆やララ婆なら行けるんだろうけど、もう二人とも現役は引退している。

「まあ、オイラは冒険者じゃないし？」

「普通は冒険者じゃないもんは、魔獣のいるエリアにや近づかないもんなんだよ」

「だって、最初父ちゃんに、『最果ての亀裂』でオリハルコン拾つて来い、って言われたし」

びきびきつ、とララ婆のこめかみに青筋あおずしが立つた。

ララ婆の投げた短剣が、抜き足差し足で逃げようとしていた父ちゃんの頬をかすめて、後ろの壁に突き刺さる。父ちゃんの頬から、たらり、と血ぬめがたれた。

「ノーマードー！」

「オ、オムラは普通に行つてたぞ」

「オムラは史上最高レベルの聖騎士だつただろうが！ たかだか十四やそこらの『子どもに、なんてこと言つてるんだいっ』

「あ、八歳の時」

今度は青筋を浮かべたルル婆に、父ちゃんは正座のまま水に漬けられた。

魔法つて便利だね。

「あ、死なない程度でやめたげて」

「まったく、ノアしやは苦労するねえ。鍛冶屋なんかやめて、あたしyanとこおいでな。立派な

盗賊にしたげるから」

抱きしめられてナデナデされるのは気持ちいい。たとえその相手が、オイラより小さな婆ちゃんだとしても。

「残念だけど、ララ婆。ダメダメでも、オイラは鍛冶してる父ちゃんが好きだから、盗賊にはなれ

ないよ」

「また、しょんなこと言つて。何回誘つてもこれなんだから。ホントに、オムラそつくりだよ、この子は」

ララ婆が言うには、母ちゃんも、鍛冶以外ダメダメなどころがまたかわいい、と言つて父ちゃんを甘やかしていたそうだ。

ん？ オイラが苦労してるのは、ひよつとして母ちゃんのせい？

「ところで、ノアしyan。聞きたいことがあるんじゃけどね。その首巻き」

父ちゃんを水に漬け終わったルル婆が、オイラの首元の黒いもふもふを指さした。

「それ、魔獣だろ？」

「魔獣だと!?」

03 チート魔獣チギラモグラ

それまで、水がめの側の壁ぎわでしなびていたジェルおじさんが、すごい勢いで詰め寄ってきた。
「魔獣の王都への持ち込みは、王国法第百四十七条によつて禁止されている！ 例外は、魔獣使い
免許持ちの使役獸のみだ。ノア、お前、ティマー免許は？ 魔獣は、何であれ全て危険なんだ。使
役されていない魔獣なんて、歩く災害と同じなんだぞ」

いつもヘラヘラしているか情けないかのジェルおじさん。その真剣な顔を初めて見た。

「ティマー免許？」

「持つてないのか？ ということは、それは野良魔獣！」

普段の穏やかさをかなぐり捨てて、ジェルおじさんが剣の柄に手をかける。

「おい、ジェル！」

「黙れノマド！ 人里に降りた魔獣は倒さねばならない。それが法だ！」

「あの魔獣は、ノアの首にいるんだぞ！ お前はノアの首をはねるつもりか!?」

「ノアの首になんて、かすり傷さえつけやしないさ！」

引き抜かれたジェルおじさんの片手剣が、逆袈裟切りにオイラの首元へと迫る。

あれは確か、三年前に父ちゃんが打った【希少級】。さすがは父ちゃんの作、【伝説級】には及ば
なかつたけれど、綺麗な剣だ。ジェルおじさんの剣をよける間、オイラはそんなことを考えていた。

「大丈夫か、ノア!?」

「……よけた、だと!?」

愕然とするジェルおじさんの一方で、心配した父ちゃんがオイラに駆け寄り、オイラの全身を触

りまくつて、ケガがないかどうかを確かめている。

ルル婆とララ婆には、オイラがよけたのが見えていたみたいだけど、
戦闘職じやない父ちゃんは見逃していたようだ。

さつきルル婆に水漬けにされた父ちゃんは、まだぐつしょりと濡れている。大丈夫だから、あんまり触らないでもらいたいなあ。つてか父ちゃん、風邪ひかないといいけど。

「大丈夫だよ、父ちゃん。オイラも、黒モフも」

オイラはそう言って、ジェルおじさんの殺氣におびえて、胸元にもぐりこんでしまつた黒いもふもふを掴み出して見せた。

とは言つても、よっぽど怖かつたのか、またすぐにもぐつてしまう。

その黒モフをルル婆たちがまじまじと覗き込む。

「黒モフ？ その魔獣の名前かい？」

「なんとまあ、ノアしやん。魔獣に名前をつけているのかい」

「ジェル坊、ちよつとは落ち着きな」

「そうじや。法じやなんのと、お前しやんは肝つ玉がちいしやいのう」

「しかし、ルル婆」

ジェルおじさんがそう口走った瞬間。

ルル婆の額に、特大の血管が浮かんだ。

どす黒いオーラがゆらりと立ち上る。これはまずい。

ゴカツツツ !!

と盛大な音を立てて、ジエルおじさんの顔面にルル婆の魔法の杖が沈んだ。

ジエルおじさんの、壯年にしては端整な顔が、泡を噴きながら後方に飛んだ。

ルル婆の魔法の杖は、極大の魔水晶がついた特注品だ。父ちゃんの師匠に当たる名工の作で、魔法の効率がとても良くなるとルル婆愛用の品で。

もちろん、殴^{なぐ}られると、とても痛い。

「わしやが、なんじやつて？ ジエル坊」

ルル婆、ララ婆の呼び方には、絶対のルールが存在する。つまり、二人を『婆ちゃん』と呼べるのは、この世でオイラだけ。父ちゃんやジエルおじさんは、『姐さん』と呼ぶのが決まりだ。

英雄王さえ足蹴^{あしげ}にする、絶対強者。それが大賢者ルルと大盗賊ララ。

つて、大賢者なのと大盗賊なのは、ついさつき知つたんだけども。

「……ル、ルル姐さん……」

「そうかい、さつきのは、わしやの聞き違ひじやね？」

「あたしやにも、聞こえた氣がするけどねえ」

ララ婆にまでジロリと睨^{にら}まれ、ジエルおじさんは首をブンブン横に振ると、そのまま青い顔をしてカクッと倒れた。

返事がない。……ただの気絶体のようだ。

「さて、ノアしやん」

ジエルおじさんが氣絶しているのを確かめると、ルル婆が笑顔でオイラに尋ねる。

「スキルポイントに、余りはあるかの？」

オイラは首を傾げる。

この世には、スキルポイントというものが存在する。経験値をためることでレベルが上がり、レベルがひとつ上がるごとに、好きなスキルにひとつスキルポイントをプラス出来る。スキルの種類は数知れず。

また、種族ごと、職業ごとに固有のスキルというものもある。例えば、母ちゃんは鹿の獣人だから、鍛冶スキルを選択することが出来なかつた。そのぶん、父ちゃんの選択肢がない、治癒や聖魔法、といったスキルがあつた。

オイラは父ちゃん似で良かつたと思う。

鍛冶のない人生なんて人生じやない！

つて、その鍛冶すら自己流なんだけど。

ちなみに、普通の仕事をしてても経験値は得られる。戦闘職じゃない父ちゃんのレベルが80のは、そんな理由からだ。とは言つても、普通の仕事より魔獸と戦闘したほうが多く経験値を得られるのは間違ひなく、当然、一般人よりは冒險者のほうがレベルは高い。

また、経験値を得たものごとにスキルポイントを振る必要は全くなく、剣での戦いで得たスキルポイントで魔法のスキルを獲得^{かくじゆ}、なんて裏技も存在する。というか、最初は魔法なんて誰にも使えないわけで、そもそもしないと魔法使いなんて生まれない。

で、オイラのスキルポイントに余りがあるか、というと。

「んー、昨日鍛冶スキルに全部振っちゃつたばかりだから、今はないかな」「しょのようじやな」

再びグルグル眼鏡をかけたルル婆が、オイラをじっくりと眺める。

鑑定つて、レベルやステータスの他に、スキルポイントまで見えるんだ。

婆ちゃんたちが考え込んでいる間に、オイラは土間から上がった先の板間に座布団を並べ、火鉢の上に載つていた鉄瓶からお湯を注いで玄米茶を淹れる。普段は番茶だから、戸棚の茶筒に玄米茶が残つて良かった。なんか、婆ちゃんたちつていうと玄米茶な氣がするんだよね。

「スキルポイントに余裕があれば、ジエル坊が寝てる間に、ティマースキルを1でも振らせて、ティマー免許を申請しちまおうと思つたんだけどねえ」

「ジエル坊は、魔獸にやトラウマがあるからねえ」

「ああ、あれか……」

父ちゃんとマツ翁は思い当たることがあるのか、うんうんと頷いている。

オイラの用意した座布団にマツ翁がどつしりと腰かけると、床板がギシッと悲鳴を上げた。うち、結構古いからなあ。床、抜けないといいけど。

「ん？　ちょっと待つて。ティマー免許つて、そんな簡単に取れるの？」

「ティマースキルさえあることが、冒險者ギルドで確認出来ればね。スキルの有無は、魔道具で簡単に分かるからの。冒險者登録をして、しょのまま申請しちまえばいい」

首を傾げたオイラに、ふわふわと浮いたまま玄米茶をすすつているルル婆が説明してくれる。

「なるほど……つて、冒險者登録？　オイラが？」

「冒險者登録をしている鍛冶士だつているしやね。しょこのノマドのよう！」

オイラはびっくりして父ちゃんを見つめる。父ちゃんが冒險者をしていたなんて知らなかつた。

「……オムラに付いて行きたかったんだよ」

「……あさつて」と明後日のほうを向いて、父ちゃんがボソッと言う。

やばい、照れてる父ちゃん、かわいい。

「まあ、ノアがその魔獸を捨ててくる、つてのが一番の近道だが」「待て」

父ちゃんの、照れ隠しにしてはヒトデナシな言葉に、意外にもマツ翁が待つたをかけた。マツ翁は見た目に似合わず猫舌で、でっかい手のひらにちょこんと湯呑を置いたまま飲めずにいる。

「その魔獸……チギラモグラじゃないのか？」

「チギラモグラ？」

聞いたことのない名前に首を傾げると、ララ婆が驚いたように湯呑をガツッと置いた。

「チギラモグラだつて！　あの、冒險者垂涎の、経験値オバケ!?」

「経験値オバケ？」

「ほつほつほ。さすがはマツ。よく分かつたねえ」

鑑定を使って黒モフも見たのか、ルル婆が笑顔で肯定する。

「チギラモグラってのはね、『無限の荒野』だけに現れる、レア魔獣でね。攻撃力も防御力もないんだが、とにかく逃げ足が速い。見かけるのも奇跡、攻撃を当てるのはさらに奇跡、けどもし倒せたら……。とてつもない経験値が手に入るんじやよ。見たら即攻撃、が、鉄則の魔獣。なんじやけど……」

「けど？」

「どうやら、わしやは、とんでもない早合点をしていたみたいじゃわ」

「早合点て？ もつたいぶらんで、早く言つとくれ、ルル」

せつつくララ婆に、ルル婆がにんまりと笑つた。

「見かけたら脊髄反射せきずいはんしゃで攻撃こうげきしどったから、今までチギラモグラの鑑定なんぞしたことがなかつたが、コイツ、とんでもないユニーカスキルを持つちよる。なんと、パーティメンバー全員に、獲得経験値五倍、じや」

「「経験値五倍つ!?」」

オイラとルル婆以外の声が、綺麗にハモつた。

04 オイラの何の変哲もない日常①

「なに、それ？ すごいの？」

首を傾げたオイラの肩をルル婆が掴み、ぐわんぐわんと前後にゆする。ちょつ、お茶がこぼれるつ。

「知らなかつたのかい！ 経験値五倍つてこたあ、普通の五倍の速さで経験値がたまる、つまりレベルアップ出来る、つてことだよ！ 知らずに、なんでこんな魔獣とパーティなんて組んでるんだいつ？」

「え？ 拾つたから？」

「拾つたあ？ 逃げ足だけはとんでもない、チギラモグラを？」

ルル婆の眉が、きれいに八の字に寄つた。

「五年くらい前だつたかな？ 今よりずっと小さくて、ホントに毛玉みたいで。弱つてゐみたいだつたから、オイラの弁当を少しやつてみたら、食うわ食うわ、あつという間に弁当全部食べちゃつて。そしたら、なつかれちゃつてさあ」

「『無限の荒野』で？」

『無限の荒野』で」

「はあ……」

ルル婆にもため息をつかれた。

「でも、パーティなんて組んでたかな？まあいいや。ララ婆、要するに、レベルがひとつ上がつてスキルポイントが手に入れば、黒モフを連れてても良くなるんだよね？放そくにも離れないし、オイラもなんだかんだで愛着があるし、べつにジエルおじさんが言うみたいな悪い奴には思えないし。出来れば、このまま飼つてやりたいんだ」

ジエルおじさんが気を失つて安心したのか、ふところから少し頭を覗かせて、おどおどと周りを見回している黒モフを、オイラはそっと撫でた。

大きな目を嬉しそうに細めた黒モフに、やっぱりオイラは、こいつのことが好きなんだと思う。オイラには経験値とかレベルとか、そんなには必要ないけれど、こいつはオイラの友達だ。捨てるなんてとんでもない。

「それは言つてもね、ノアちゃん。レベルっていうのは、高くなればなるほど、上がりにくくなるものなんじやよ。現にわしやは、レベル623じゃけれど、600からここまで上げるのに、十五年かかつたんじや。ノアちゃんはレベル596。ひとつ上げるのに……はて、その魔獣の力があるとも、ひと月はかかるじゃろうて」

浮いたまま鉄瓶から急須にお湯を入れ、おかわりを注いだ婆ちゃんたちが渋い顔をする。
え？ とオイラの頭に疑問符が浮かぶ。

「ひと月？いや、ちょっと待つててよ。そんなにかかないとと思うし。試しに……うん、二時間

くらい待つてくれる？」

「二時間？」

「うん、ちょっと友達に会つてくるから」「友達？」

ふよふよと浮きながら、体ごとそろつて首を傾げるルル婆とララ婆に、ようやく一杯目のお茶をすすぐれるようになつたマツ翁がゆっくりと声をかける。

「ルル姐、ララ姐。五年前からチギラモグラのスキルがあつたとしても、計算が合わない」
「は？」

「……しようか。毎日毎日、『無限の荒野』で魔獣を狩つてたとしても、五年でレベル100にしゅらとしても届かないじやろう。獲得経験値五倍があつたとしても、普通の手段で、十四歳で596になんてなりっこないわの」

「どういうことだ？」

「ノアしやん。普段ノアしやんがすることを、しょつくりそのまま、やつてみせてくれましえんかねえ？」

いつにない丁寧な口調で、ルル婆に凄みのある笑顔を向けられたオイラは、黙つてこくこくと頷くしかなかつた。

「えーと、まず、朝、父ちゃんのご飯を用意して」

土間にあるかまどの前で、オイラは説明を始める。この時点では、既に父ちゃんはルル婆に睨まれ

て体を小さくしている。

ちなみにジエルおじさんは、ルル婆に睡眠の魔法を重ね掛けされて、あと四時間ほど起きないそうだ。父ちゃんもルル婆の魔法で乾かされていた。

「まだ父ちゃんは寝ることも多いし。父ちゃんのお昼ご飯用のおにぎりと、漬物と、オイラと黒モフの弁当のおにぎりもここで一緒に作つて。……ほんとに作る？」

「今日は二時間でレベルアップという目的があるからね。はしょつてはしょつて」

「じゃ、次は倉庫に移動」

オイラの後について、ルル婆とララ婆、マツ翁に父ちゃんがぞろぞろと移動する。

本来の鍛冶屋の倉庫には、今はほとんど何も入っていない。

オイラが集めた鉱石や素材も最初はここに入れていたんだけど、酔っぱらった父ちゃんが次々に持ち出して酒に変えちゃうんで、オイラは父ちゃんの倉庫の裏に、自分用の倉庫として穴を掘っていた。入り口は小さいものの、数年をかけて拡張に拡張を重ねたそこは、もう父ちゃんの倉庫よりもずっと広くなっている。

父ちゃんにオイラの倉庫の中身を見せるのは、また色々と売られそうで不安。

だから、ルル婆たちには父ちゃんの倉庫のところで一旦待つてもらつて、オイラは自分の倉庫から、鉱石や素材拾い用の装備を取つてきた。

身の丈たけほどもあるバカでかい古いリュックと、自分で打つた剣が三本。一本は腰に、残りの二本はリュックにくくりつけてある。

なんで三本なのかというと。

剣には耐久力というものがある。

何度も何度も戦つていると、剣は疲れ、その内に割れたり折れたりしてしまつ。

軽い剣は速く振れるけれど耐久力が低く、重い剣は速度は遅くなるけれど耐久力が高い。剣の『耐久力』『速さ補整』『攻撃補整』『防御補整』は、鍛冶スキルの『武具鑑定』で数値化して見ることが出来る。

マツ翁みたいな重戦士なら、重くて耐久力の高い剣でもいいんだろうけれど、オイラみたいなチビはスピード重視。折れること前提で三本持つていく、というわけだ。

ちなみに、オイラが自己流で打つた剣にちようどいい鞘さやなんて毎回用意出来るはずもなく、剣は全部、ボロ布でグルグル巻きだ。

「剣が、三本」

「そいつあ、ノア、お前が打つたのか？」

父ちゃんは布を取つて中身を見たそうだつたけれど、今日は黒モフのため、なるべく急がないと。

「そうだよ。毎日、鉱石を拾つてきては練習してるんだ。父ちゃんみたいにはまだ打てないけど。

それで、その打つた剣を持って、また鉱石を拾いに行く

ちょっと感心したようなピックリしたような父ちゃんの表情に、鼻の奥がムズムズする。

どうだい、ちょっとはオイラを見直した？

いつか、父ちゃんを超えるような剣だつて、打つてみせるんだから。

「で、走る」

水筒を腰にくくりつけると、オイラは一、二回その場でびょんびょんと飛び跳ねて、足の調子を確認。そのまま一気に加速して、『無限の荒野』へ向けて走り出した。

チラッと振り返ると、ルル婆とララ婆 マツ翁に父ちゃんが見る間に小さくなり、置いていかれたルル婆が慌てて何かの魔法を発動したようだった。

十分後、『無限の荒野』を走っているオイラのところに、ルル婆の魔法の長座布団に乗ったみんなが追いついてきた。

普通よりはだいぶ大きい長座布団だけれど、だいぶきゅうくつに見える。

「ノ、ノアしやんノアしやん。ちょっと待ちんしやい」

スピードのせいか、切れ切れに聞こえる声は、かなりきつそうだ。

さすがのルル婆でも、マツ翁を浮かせて運ぶのは大変なんだろうな。

「急がないと、ジエルおじさんが目を覚ますのに間に合わないよ？」

「た、ただ走つただけでこのスピード……それに、途中に何匹か魔獸がおつたが……」

そういえば、途中に何かいたような気がする。

鍛治の素材になる魔獸じやなかつたから、あんまり気にしなかつたけど。

「あ、あれ？ よけたよ？」

「よけた！ 岩オオカミと、鬼アザミ、針トカゲを!? ベテラン冒険者だって、数人がかりで相手にする魔獸だよ!」

荒野に出てくる魔獸つて、そんな名前なんだ。岩オオカミと針トカゲは、見たまんまの名前だな。「オイラ、逃げ足だけは自信あるんだよね。素材になるなら戦つて回収することもあるけど、今日は急いでるからね。早くエスティのどこに行かないと」

「エスティ？」

「そ。オイラの友だち。ルル婆たちは？ 魔獸どうしたの？」

走りながら聞くオイラに、ララ婆が胸を張つた。

「ふん、しょんなの、あたしやの投げナイフで一撃だよ」

「すごいねえ。でも、投げちゃったナイフがもつたないね。帰りに回収してあるかな？」

「盗賊は投げナイフが得意だからね。みんな、『ナイフ回収』のスキル持ちなのしゃ。当然、あた

しゃもバツチリ回収してるよ」

そう言つて、ララ婆は腰のホルダーから取り出した投げナイフを、片手に五本、カードのように広げて見せた。

「そんなスキルがあるんだね」

オイラの言葉に、なぜかルル婆が得意そうに笑つた。

「ほつほ。わしやの魔法の座布団の最高スピードに乗つておつて、ナイフを投げて魔獸に当てるなんて軽業をしてのけるのは、世界広しとはいえララだけしゃね」

「ちんまい頃から乗しねられてたからねえ」

「いざというとき 一人分の重さに慣れてなくちや、一緒に逃げられないじやないか」

「ルル……」

「なんだい、今しやら感動したのかい？」

「大好きしや、ルル～」

ララ婆がルル婆に抱きつこうとしたところで、マツ翁がその襟首を掴んで止める。

「ララ姐、このままだと、竜の領域に入る」

「えっ!?」

ララ婆が慌てて辺りを見回す。

話しながらも走り続けたオイラたちは、そろそろ『無限の荒野』を抜けて、『竜の棲む山脈』のふもとに到達しようとしていた。

「ノアしやん!? あんたの友だちとやらのところには、まだ着かないのかい!?」

「まだまだこれからだよ。オイラには慣れた道だけど、ルル婆とララ婆は、いちいち戦ってたら時間かかってしようがないでしょ? どうする?」

「慣れた道、つて……」

そういうえば、さつきから何となく父ちゃんの存在感がないな、と思つていたら、マツ翁の背中に寄りかかつて目を回していた。

レベル80とはいえ、酒浸りのゲータラ生活をしていた父ちゃんには、ルル婆の全力座布団疾走はキツかつたみたいだ。

「わしやらることは気にせんでええ。魔獣の知覚を外す魔法があるからの。わしやらよりレベルが

下の魔獣にしか効かんし、こっちから攻撃を仕掛ければ気付かれるが、ノアしやんに付いて行くだけなら何とでもなる。ただし、わしやらもノアしやんの手助けはせんから、しょのつもりでの」「ちょっと、ルル！」

顔をしかめたララ婆に、ルル婆が穏やかに笑う。

「ええから。ええから。ノアしやんの『いつも』を見せてもらうんじやろ? 慣れた道と言うんじや。大丈夫なんじやろうて」

そうしてオイラたちは、『竜の棲む山脈』へと突入した。

05 神の鍛冶士から見た異常な日常

「ウソだろ?」

『無限の荒野』よりはだいぶスピードが落ちたせいか、それまで目を回していた俺——ノマドは、ようやく意識がはつきりした。気が付いてみれば、周りは『竜の棲む山脈』……というのも相当にアレな現実だが、それよりも信じがたいものが俺の目の前にあつた。

……ノアが、自分の子どもが、グリフォンのすぐ目の前にいる。

『竜の棲む山脈』とはい、『無限の荒野』から連なるふもと付近には、純粹な竜種は滅多に現れず、その眷属を含む様々な魔獣が現れる。グリフォンや大蛇、ワイバーン、タラスク（甲羅のある

六本足のドラゴン）などの亜竜^{ありゅう}。様々なゴーレムに、竜を崇めるラミアやリザードマンなどの亜人^{あじん}。

竜の眷属たちは縄張り意識が強く、見慣れない生き物がいると普通は排除しようとする。

それなのに、ノアのことは、ほとんどの魔獸がチラッと見ただけで黙殺^{もくさつ}する。

まるで、竜の眷属同士のように。

いるのが当たり前であるかのようだ。

たまに、血の気の多そうな若い魔獸が、ノアに襲^{おそ}い掛^かることもある。

最初、それを見たとき、俺は思わず叫んだ。

「ル、ルル姐、ララ姐！ 助けて、助けてやつてくれ！ ノアが……ノアが殺されちまう！」

自分で助けに飛び出したいのはやまやまだが、俺の力では、グリフォンに一撃だつて当てるのは難しい。それどころか、ルル姐の魔法の座布団から、無事に飛び降りることが出来るかどうか。

取り乱した俺とは対照的に、ルル姐、ララ姐、マッセイ翁は不思議なほど冷静だつた。

「なんだい、今ごろ気が付いたのかい。慌てたことあるないよ」

「そ、そんなこと言つたって、あれはグリフォンだ！ ノアがかなうわけない！ 熟練^{じゅくれん}の冒險者

パーティだつて、チームを組んで討伐する相手だ！」

「見りやあ分かるよ、しょんなこと。でも黙つて見てな。いくらルルの認識阻害^{そがい}の魔法がかかっているとはい、大声を出しやあ気付かれないと限らない」

「認識阻害？ そうか、グリフォンの意識がこっちに向けば、ノアが助かる確率が上がる！」

改めて叫ぼうとした俺の頭を、ルル姐の巨大な杖^こが小突^{こづ}く。

「やめんか、バカモノ。余計なことをしゅると、かえつてノアちゃんの足手まといになるつてもんじゃよ」

そうこうしている内に、グリフォンの凄まじい攻撃がノアへと繰り出される。

グリフォンは、鷹^{たか}の頭と翼、ライオンの体を持つ魔獸だ。空からの攻撃が可能な上、強力な四肢の一撃は岩をも碎く。もちろん肉食。

血ダルマになつたノアは、慣れた様子でグリフォンの攻撃をひらりひらりとよけ、すれ違いざまに、一瞬、

ところがノアは、慣れた様子でグリフォンの攻撃をひらりひらりとよけ、すれ違いざまに、一瞬、剣を抜いた。

キイイン、と澄^すんだ音がしたと思うと、ノアの手には、グリフォンの巨大な爪^{つめ}が握^{にぎ}られていた。ノアが剣で叩^{たた}き斬^きつたのだろう。

グリフォンの爪は、滅多に流通しない鍛冶^{つき}の希少^{きしお}素材だ。

よくやつた、ノア！ と拳を握つた直後、ふと思いつたつてサアツと青ざめる。

確かにグリフォンの爪は欲しい。でも、爪なんか折つたら、鍛治馬鹿と散々周りに言われている俺が言つても説得力がないのは分かつてゐるが、いくらい素材が目の前にぶら下がつていて、生きて持つて帰れなくちゃ意味はない。

中途半端に傷つけられたグリフォンは、さらに怒り狂つてノアを追撃^{ついげき}してくるに違ひない。グリフォンにとつて、爪の一本が折れたくらい、大したダメージにはならないだろう。

なんで俺は、鍛冶にばかりスキルポイントを振つて、いざというときにノアを助けられるスキル

のひとつも取らなかつた？ ノアもノアだ。戦い慣れているなら、素材を探る前に致命傷のひとつも負わせたらどうなんだ？ 半端に傷つけて手負いにするより、大技で行動不能にさせるか諦めて逃走するのが、魔獸と戦うときの鉄則だろ？！

手に汗を握り、必死に心の中で『逃げろ、逃げろ、出来れば爪を持つたまま、いやしかし』とか唸つている俺を尻目に、事態は意外な展開を見せた。悔しそうに一声うなつたグリフォンへ、ノアが笑顔で「ありがとね」とか言つて手を振つたのだ。

ふん、と鼻を鳴らして、グリフォンはぐるりと後ろを向いて去つていく。

「……は？」

背を向けるグリフォンを指さし、目を丸くして振り返ると、ララ姐が軽く肩をすくめた。

俺は唖然としたが、ルル姐たちは既に見た光景だったのだろうか。やはり平然としていた。

そんなことが、何度も繰り返された。

さすがに『竜の棲む山脈』にいる魔獸は、『無限の荒野』の魔獸とはレベルが違う。ノアのスピードをもつとしても、ただ走つて振り切ることは無謀だろ？から、戦うのは理解出来る。しかし、ウロコや爪、牙、羽を取られた……つまり、傷つけられた魔獸がノアを見逃す理由が分からぬ。普通なら、さらに怒り狂つて追撃してくるはずだ。

『竜の棲む山脈』を登るにつれ、現れる魔獸もどんどん強くなつていく。ふもとと同じ種族の魔獸だつたとしても、レベルが遙かに違う。

中腹にもなると、亜竜が増え、飛竜もぼちぼち現れ始める。

それでもノアは多くの竜種に無視され、襲われたと思えば器用に素材を剥ぎ取つていく。
殺しも、殺されもしない。

剥ぎ取つた素材は、たまに拾つているらしい鉱石と共に、背中の巨大なリュックに無造作に放り込まれる。

もはやかなりの重さになつてゐるはずなのに、ノアの足取りに乱れはない。休憩する暇まず、『竜の棲む山脈』の急な斜面を凄まじい速さで登つていく。

そしてついに、中腹を過ぎる頃、ひとつ洞窟へと辿り着いた。

「ここが、目的地か？」

ルル姐の認識阻害の魔法は、魔獸だけでなく獣人にも効果があるらしいが、ルル姐がノアを仲間とみなしているので、ノアにも問題なく声が届くそうだ。

「そうだよ。ここは本来の入り口じゃないけど。この奥に、エスティがいる」

ここまで走りどおしだつたのに、ノアには疲れた様子すらない。

あれだけ色々とあつたというのに、ララ姐に聞くと、家を出てからまだ一時間も経つていないらしい。

「そのエスティって人に会えば、レベルが上がるのか？ こんな『竜の棲む山脈』のど真ん中に……どんな大賢者だつづーんだ」

「大賢者とて、こんなところに住むのはごめんじやの」

「大盗賊とてごめんだの」

「……」

マツ翁の無口さは相変わらずだが、多分同じことを考えている。

「んー、それにしてももつたいたな。途中の崖の上で、オリハルコンのにおいがしたんだけど、急いでたから素通りしちゃったよ。今度また採りに来なきや」

「知らないの、ルル婆？ 鉄だつて銅だつて、においがするじゃない？」

「オリハルコンにおいなんてあるのかい？」

「鐵臭い、つてのは何となく分かるけどねえ」

「鍋で沸かしたお湯は、鉄臭いからねえ」

「犬の獣人は、鼻がいいから」

金属のにおいをかぎ分けられる、というのは、有望な鍛冶士の第一条件だと俺は思う。

そうすると、ノアには、鍛冶士の才能があるのかもしれない。

さつきちらつと見えた、ノアが打つたという剣は、刃紋も何もめちゃくちゃな、習作と言ふにも

まだまだな出来だったけれども。おそらく、自分なりに速さを追及したのだろう。

俺たちは、ためらいなく進むノアに続いて、狭い洞窟を降りて行つた。

ここからは徒歩で、と一旦長座布団を降りたものの、早々に俺だけ付いて行けなくなり、問答無用で座布団に乗せられた。洞窟内にスペースがあまりないこともあり、各々固まらずに進んでいく。ルル姐は魔法で浮き、俺は座布団、ララ姐は身軽に徒步で、マツ翁は鎧でゴリゴリと岩壁を削りながら歩いている。坂道はもちろん、ときには崖のようになつている暗い洞窟を、ノアは危なげなく

ひよいひよいと降りていく。

犬の獣人は、割と夜目がきく。それでも、この暗い、岩と崖だらけの洞窟は危険極まりない。

今更ながら、俺はノアのことを何も知らなかつたのだ、と苦い思いがした。

「なんだか暑くなってきたねえ」

「なんだかわしゃ、嫌な予感がしてきたわ」

「……」

マツ翁も無言で頷いている。

洞窟を降り始めてどれほど経つたか。ノアと俺たちは、やがて赤い光で満ちた広い空間へと辿り着いた。

そして、軽い調子でノアが言う。

「他の誰かを連れてくる許可はもらつてないから、怒られるかな？ 彼女が、エスティ。エスティローダ。火竜の、女王だよ」

その巨大な赤い竜は、威風堂々と俺たち卑小な人間を見下ろしていた。

そうエスティを紹介した直後。

父ちゃんとオイラたちに、炎のブレスが襲い掛かった。

「あちやあ、やっぱ無許可はまずかつたか」

エスティのブレスには0・5秒の溜めがある。息を吸い込むための時間というか。

オイラは慣れもあって、ブレスの気配、エスティの顔の向きから、ある程度余裕をもつてよける

ことが出来た。

跳んで避けたオイラのすぐ横を、ブレスが濁流のように通り過ぎる。

エスティの存在感に呑まれて動けずにいた父ちゃんたちは、まともにブレスを食らってしまった。

「エスティのブレスは初見殺しだよな。……エスティ！ あれはオイラの父ちゃんなんだぞ！」

きなり何するんだよ!』

当然とか、エスティのブレスは、ルル婆がとっさに張った魔法障壁によって防がれていた。

それでも相当焦った顔をしているから、不意打ちのブレスはキツかつたようだ。

『父ちゃんだと？ 親を紹介するということは、人の間では、つがいになる前段階の行為だと聞く。

我を娶る気にでもなったのか？』

エスティの顔の高さまで思いっきり飛び上がり、顔面に向かつて降り下ろした剣は、エスティの

腕に簡単に阻まれ、ギャリンッと嫌な音を立てて砕け散った。

ここまで、だいぶ魔獣相手に使ってきたから、まあ、しようがない。

柄だけになつた剣を投げ捨てるど、急いで壁を蹴って場所を移る。一瞬前までオイラのいた空間

を、エスティの炎のブレスが通り過ぎた。

投げ捨てた柄は、エスティの足元に広がる溶岩に落ち、ジュッと溶けた。

オイラは周囲の岩壁をあちこち蹴つて跳び渡り、エスティの爪を避けながら、背中のリュックから二本目の剣を引き抜いた。

「いつもどこから、そんな偏つた人間の知識をつ！ 聞きかじつてくるんだよつ！ 友だちにつ！ 家族を紹介しちゃダメなのかよつ!』

今持っている剣（二本目）が折れたら、全力で逃げる。最後の剣（三本目）が折れる寸前までいつてしまつたら、たとえエスティに勝てても、帰り道で死ぬ。

武器もなく通してくれるほど『龍の棲む山脈』の魔獣は甘くない。

というか、今までエスティに勝てた試しなんてないんだけれども。

『我が棲み処にこそこそと無断で立ち入つたのだ。お仕置きくらいは当然であろう？ まして、あれは大賢者ではないか。あんなそよ風程度でどうにかなるほどの婆ではないわ』

こそそそと、ということは、ルル婆の認識阻害に気付いていたのか。前から強い強いとは思つていたけれど、やっぱりエスティのレベルはルル婆より上らしい。

「あんたに婆あ扱いしやれるいわれはないよつ！」

下のほうで、ルル婆が何やら元気に叫んでいる。竜は長生きだと聞いたから、エスティも本当はオイラは魔法が使えない。

一度でも空中で捕捉されたら、叩き落とされて、それでジ・エンドだ。

落下の衝撃を弱める『浮遊』も、空中移動の向きを変える『飛翔』も使えない。

周りの岩壁を蹴り渡るスピードを殺されたら。

ただ落ちて潰れるトマトに同じだ。

そもそも、オイラの防御力は紙も同然。エスティでなくても、『龍の棲む山脈』の魔獸の攻撃を、一撃だつて食らえば致命傷だ。オイラの持つ剣だつて、エスティの攻撃をまともに受ければ、あつ

という間に碎け散るだろう。

オイラに出来るのは、ただひたすらに攻撃をよけながらのヒット・アンド・アウエイ。

エスティの攻撃は足でよけ、こちらからの攻撃のみの使用とはいえ、それでも剣の耐久力はゴリゴリと削っていく。

『確か、あの婆とは百年ぶりくらいかの？ 以前に会った折はまだほんの小娘だったか。少し見ぬ内に大賢者とは、大した出世よの』

「わしやは、まだ百年も生きちやいないよつ」

エスティの翼から、かまいたちが放たれる。無差別＆広範囲に繰り出される、無数の真空刃は、ひとつひとつの威力はさほどではないものの、全て避け切ることはかなり難しい。防御力が無に等しいオイラにとつては、ブレスより遥かに嫌な攻撃だ。岩陰に隠れたとしても、機動力を殺すこと死につながる。かまいたちが過ぎ去った瞬間、エスティの爪や尾に殺されるだろう。

宙に浮いたままでは、かまいたちを避け続けることは出来ない。オイラは岩壁を一気に走り降り

た。たとえ壁でも、走っているなら避けられる。

かまいたちは、基本、透明だ。

最初に放たれたときは見事に一発くらつて、それでもなんとか首の皮一枚で生き残り、治療の柿をかじりながら、命からがら逃げ出したつけ。それからも、かまいたちを出されるたびに一目散に逃げ続けて、数十回目の挑戦でようやく『見える』ようになつた。

こつちに向かってくる空気の揺らぎが、見分けるポイント……と言いたいところだが、無風の空間をやつて来るただ一発のかまいたちならともかく、エスティはしつちやかめつちやかの乱気流の中に、わざと無数の小さなかまいたちをまぎれさせてくる。

慣れとカン、そして微妙な違和感。

かまいたちの到達する前の一瞬、かすかに濃くなるエスティのにおい。

無意識の中の、刹那の判断だ。

今では、集中さえ途切れなければ、ほぼかすることもなくなつた。

剣は攻撃のために温存。

ひたすら足でよけ続ける。

重要なのは、かまいたちを放っている間は、たまにブレスが降つてくることはあつても、爪や牙や尾が飛んでくることはないつてことだ。つまり、オイラにとつて、地面に足がついている限り、今が絶好のチャンス、つてわけ。

かまいたちが一瞬途切れた隙に、オイラは胸元の金具を外した。

しゆるつ、とリユツクの背負い紐が自重に引かれて後ろに流れた。ボンボンボン、音を立ててリュツクが地面に吹き飛んで、パンミーが吹き飛んで

ドシンツツツツと重い音を立ててリュックが地面に激突し、オイラはさらに加速する。

回りがきく

次の一撃で仕留められなければ、後はない。

でもそれは
いゝものこと

かまいたちの合間に繰り出されるブレスに追われつつ、オイラはエスティへと一気に駆け寄った。
そのままエスティの^{また}腕の間を走り抜けるべ、尻尾からうその左肩がナテ必死に駆け上がる。

そのままでエスティの脇の間に走り抜けると、肩からその方肩をかけて、勢いよく駆け上る。エスティの皮ふは高温の炎をまとつて、炎こゝの煅冶室のブリツの面目躍如だ。それで

足の裏にじゅわっと嫌な感触がする。だけど、このスピードなら焦げたにおいは後ろに置き去りに

つづいて鼻へは届かない。
立肩の後ろで、一枚ごず、

オイテの狙いはコレだ

戦いながら、全身をくまなく観察して見つけた。

オイエはウロコの隙間に下から剣を潜り込ませ
渾身の力を込めて切り上ける

やつたあ―――。とつたよおおおおおつつつつ―――。「

ギレイな金属音を立てて オイフの鉗は真二に折れてしまふたけれど その

鍛治屋の手袋を通して、じんわりと熱さが伝わってくる。

ウロコを剥いだ勢いでそのまま背後にすつ飛んだオイラに、エスティの手が伸びる。

…………そして、その手が優しく受け止めてくれた。その手のては、既に彼はない。

卷之三

段々と強くなつていくの。我も、いつも次が楽しみでならぬ』

木打ましして、いたゞく、口に隠さない、ほんの、まことに、

元が巨大なエスティは、人型になつても父ちゃんより背が高い。深紅の長い髪に、炎のようになびく

だ、大丈夫か、ノア!』

そこに、父ちゃんが走り寄つて来た。オイラを心配して来てくれたんだろうけれど、耳は後ろにペタリと寝て、尻尾もくるりと股の間に挟まっている。ガタガタ。ぶるぶると震えていて、怖いのに

犬の獣人は、いくら表面を取り繕つても、内心がしつぽに表れるから不便だよね。

大丈夫だよ、父ちゃん。ほら、この通り。無事にウロコもゲット出来たしさ」